

みんなつながっている

近藤 朗

お向かいの家の庭の藤棚でのドラマです。

この夏のことです。キジバトの夫婦がせつせと小枝を運び、ちよつと雑な感じはしましたが巣を作り、二個の卵を産みました。昼間と夕方で交代しながら卵を温めます。やがて親鳥が白いかけらをくわえて何度か巣から飛び立っていきます。卵がかえってヒナが生まれ、親鳥は子どもの場所を敵に知られまいと遠くに卵の殻を運んでいたのです。

キジバトはオスもメスも頬あたりからミルクを出し、二羽のヒナはダンスを踊るようにミルクをむさぼります。天敵のカラスに注意をはらいながらキジバトの子育ては続きます。

日ごとにヒナが大きくなった激しい雨の日です。「ヒナは大丈夫かしら」と家主が心配していると、親鳥はどこからともなく飛んで来ます。子どもにべつたりとするのではなく、少し離れたところからヒナを見守り、いざというときに飛び込んできて子どもを守ります。それでも、家主はカラスの姿が近付くと心配になって庭に出ます。

夏の終わり、ヒナが巣立ちました。デデポップという声が聞かれなくなり、

空の巣だけが残りました。十月のある日、まだ幼い声のデデポップが古巣から聞こえました。巣立った子どもでも懐かしくなつて巣に戻ってきたのでしょうか。でも、すぐに飛び立っていったそうです。

お向かいの家の出来事から学ばされる思いがしました。親と子、それを守る地域の人たち。みんなつながっている。子どもが生まれ、成長して巣立っていく。素晴らしく、感動する。

私は、新潟県 潟小学校の教育ビジョンを思い返しました。

「親と子、それを見守る地域の人たち。みんなつながっている。」

今年度後半も皆様のお力をお借りし、子どもたちのまっすぐな成長を支えていきたいと思えます。十一月十二日の地域合同感謝の会にはたくさんの方からご出席いただき、語り合えたらと思いますのでよろしくお願いいたします。

